

■ 生き物が棲みやすい場所を増やす

(場の整備)

- 藻場は当初計画13.2haに対し、中南部海域他で36.25ha完成。海藻が活着し、メバル・カサゴ等の保護・育成を確認
- 浅場は計画約2.4haに対し、神戸空港他で2.4ha完成。干潟は計画約13haに対し、堺2区他で13ha整備中。緩傾斜護岸は計画約3.4kmに対し、新島で2.0km完成。砂浜は堺2区で0.2km完成

(直立護岸の改良・生物多様性の確保)

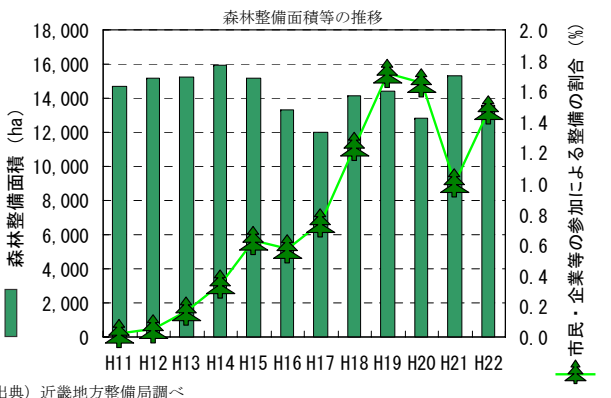
- 実験施設として「生物共生型護岸(堺2区)」が完成(H21.12) 緑藻類が着生し、生き物が確認されている



■ 大阪湾に流れ込む汚れを減らす

(森林の整備)

- 琵琶湖周辺、京都・大阪・奈良などの大阪湾集水域の各地で、地域住民、ボランティア団体及び企業などの参画を得ながら森林整備を実施
- H16~22の年間の平均整備面積約14,000ha(うち約170haは市民等参画)



■ 人と海との関わりを取り戻す

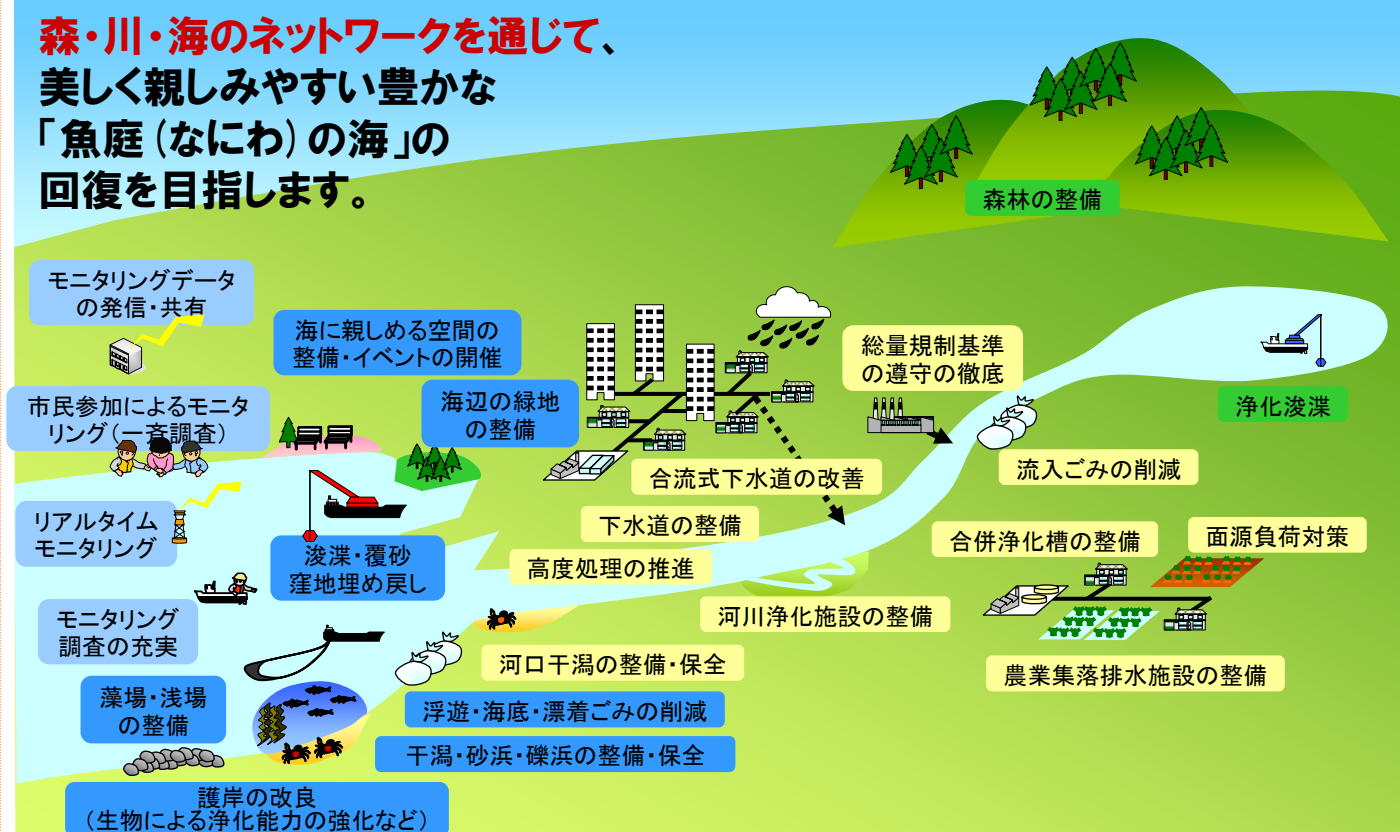
(自然的な海岸線の整備)

- 計画約5.9kmに対し、堺旧港の親水護岸他で約4.2km完成
- 海辺の環境学習やウォーキングには多くの方が参加



(海に面した緑地の整備)

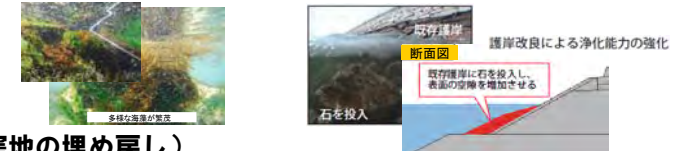
- 計画約122.7haに対し、堺2区、神戸空港他で約56.0ha完成
- 堺7-3区「共生の森」、「尼崎21世紀の森」では、市民ボランティアや企業等の協働による緑地の整備を推進中
- H24大阪湾アンケートの結果、回答数738の内、約2~3割の人が「10年前に比べて「海の色・匂い」が良くなった・やや良くなった」と回答



■ 大阪湾の水をきれいにする

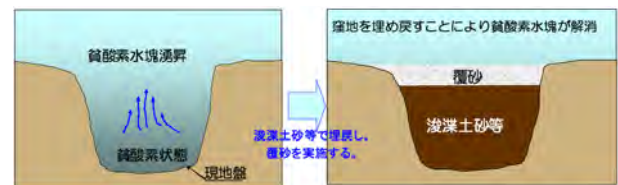
(生物による浄化能力の強化)

- 関西国際空港や新人工島他で、環境改善機能を備えた護岸の整備を推進。多様な海藻の生息を確認



(窪地の埋め戻し)

- 港湾整備に伴う浚渫土砂を活用し、堺2区や阪南2区などで試験的に窪地の埋め戻しを実施



■ 大阪湾のモニタリング

(リアルタイムモニタリング)

- 大阪湾内13箇所で、水質・流況等の自動観測装置を設置(H21) H22より観測データ配信を実施中



(大阪湾再生水質一斉調査)

- 企業や大学等との協働で、夏場の1日を定め、水質調査をH16から継続して実施(H24:496箇所) ※詳細は別紙参照

(大阪湾生き物一斉調査)

- 市民・NPO団体等と協働で、沿岸部に棲息する生き物の調査をH20から継続して実施 ※詳細は別紙参照



■ 大阪湾のゴミを減らす

(浮遊・漂着ゴミの削減)

- 大阪湾クリーン作戦、瀬戸内・川と海のクリーンアップ大作戦など市民参画による取り組みを推進 回収活動の参加者数は例年2~5万人程度で、H16~24の年間平均回収量約2,400ト



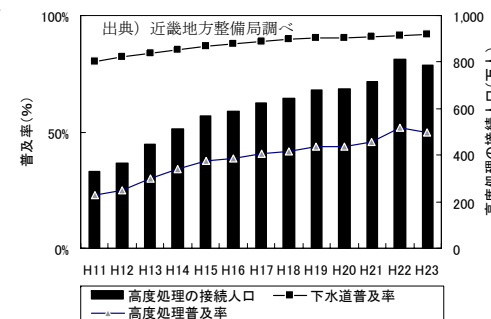
- 海洋環境整備船による浮遊ゴミや油等の回収を推進 毎年、大型ダンプ500台分のゴミを回収(約2,500m³)



- 海洋レーダによる流況データ等を利用した浮遊ゴミ・油等の挙動解析の実施

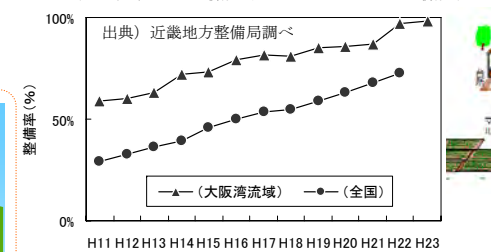
(下水道の整備、高度処理の推進)

- H16~24の期間で下水処理場4箇所、高度処理施設15箇所が完成 H23末の下水道普及率は91.8%、高度処理人口普及率は49.8%



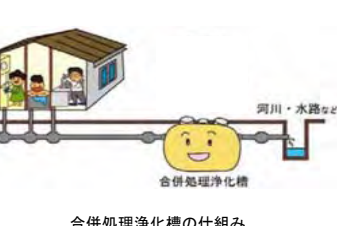
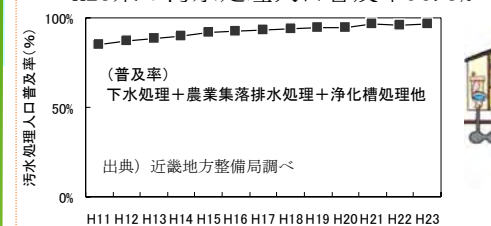
(農業集落排水事業)

- 各府県の整備構想に基づき整備推進、H23末の整備率98.3%



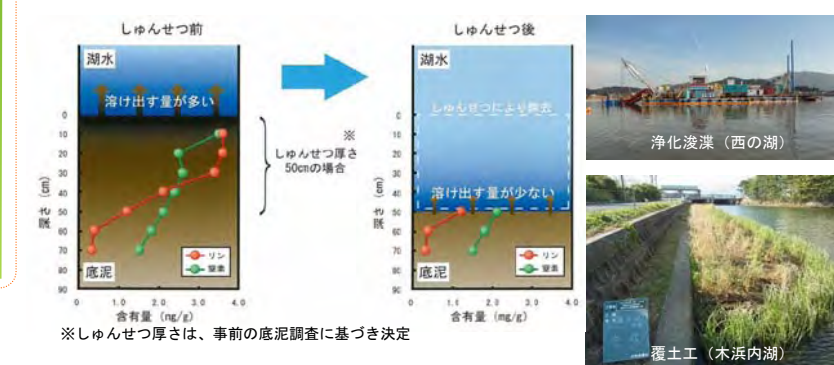
(浄化槽整備事業)

- 各府県の整備計画に基づき整備推進、大阪湾集水域におけるH23末の汚水処理人口普及率96.3%



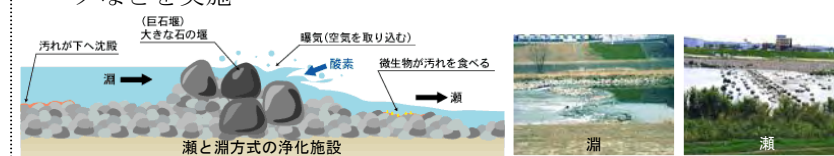
(河川浄化事業)

- 琵琶湖内湖の浄化浚渫(5箇所)や内湖拡幅(2箇所)、栄養塩溶出削減対策(覆土3箇所)、一時貯留池の整備などを実施



- 淀川では流水保全水路の整備、鶴殿地区でヨシ原の再生、城北地区等でワンドの再生を実施

- 大和川水系では浄化施設の設置・機能向上(13箇所)、モニタリングなどを実施



- 寝屋川水系、石津川、樫井川河口でも浄化施設(5箇所)、浄化浚渫(4箇所)を実施
- 土居川で海水導水事業、近木川河口で汽水ワンド整備を実施